



アジア CSR 最前線①⑦

CSR アジア会長 リチャード・ウェルフォード

高橋 佳子 (CSR アジア シニア・プロジェクトマネージャー) 監訳

オーストラリアはまるで気候変動の実験室

2013年、オーストラリアの平均気温は例年に比べて摂氏1.2度上昇し、記録が開始された1910年以降で最も暑い年を記録した。特に冬は史上最も暖かく、この気温上昇が1968年以降の最悪の火災をもたらした要因とみられている。

同国気象庁の年次報告によれば、2013年にはシドニー周辺で起きた最悪の森林火災など、気象が影響する大規模な自然災害が多発した。オーストラリアでは1950年代以降から徐々に温暖化傾向がみられ、地球上の他の地域でみられる傾向と一致していることがわかる。気象庁や世界中の情報源からのデータをみると、オーストラリア全土で温暖化が急速に進んでおり、世界の温暖化が破壊的で深刻な状況を招くことは確かな事実である。そして間もなくその影響が各地で起こり始めるだろう。

オーストラリアでは、熱波や早魃、洪水への耐性が弱いユーカリの木が危機に瀕しているという報告もある。クイーンズランド大学の研究者が100種類以上のユーカリの木を調べたところ、異常気象により絶滅する種類もあることを発見した。そうなればユーカリの樹液を頼る野生動物も絶滅の危機に瀕することになる。このことから気候変動が世界中の生物多様性に与える影響が深刻なことがわかる。

さらに、タスマニア大学の研究者によれば、地球上に存在するあらゆる生物種のうち75%が絶滅に向かっているという報告もある。過去5億4千万年の間に、気候の変化や火山の爆発により、地球は多種類の生物が同時に絶滅する大量絶滅を5回体験してきたおり、現在、6度目の大量絶滅の初期に入った可能性があるという見解を示している。

先に述べた通り、オーストラリアの温暖化は地球の気候変動の傾向と一致している。増加し続ける温室効果ガスの影響で気温が上昇し、「安全圏」と言われる平均気温が現在より摂氏2度上昇以内という状況には、もはや留まりそうもない。オーストラリアで今起こっていることを将来的には他の国も経験することになるだろう。従って、オーストラリアで起こっている変化を研究する

ことで、気候変動による最悪の影響を少しでも緩和できる可能性について模索することができる。

オーストラリア新政権に集る激しい批判

当然のことながら、こうしたニュースを受け、すでに環境保護主義者たちは、オーストラリアの新政権は十分な気候変動対策に取り組んでいない、と批判をしている。気候変動に真剣に取り組む必要があるにもかかわらず、地球温暖化を研究する多くの組織への助成金を削減したと批判されているのだ。同国政府はまた、最悪の汚染源となっている企業に対して温室効果ガスの排出量に応じて課税する炭素税の廃止も検討している。

オーストラリアの現況は二つの局面で懸念すべきといえる。深刻な気温上昇をすでに記録し、早魃や温暖化による様々な悪影響を受けている一方で、各国政府やその他の機関は緊急の課題である加速する気温上昇を止めることに消極的になっているようにみえるのだ。

過去3年間のCSRアジアの調査では、気候変動への関心が薄らぎ、さらに無関心というステークホルダーが増加する傾向がみられた。それが、実際に意義ある効果的な対策を実行できないからなのか、政策決定者の自信の欠如の表れなのか、人々が単にどうでもいいと思っているのかは定かではない。しかし、年々、ビジネス界が直面する多大なリスクなど、気候変動に関連するリスクが高まっていることは確かである。

だからこそ、企業が直面するリスクを査定し、積極的に対策を講じ、気候変動による損失と被害を軽減し、不可避の影響に適応することが、いまビジネス界に求められている。オーストラリアの状況を見れば、真のリーダーシップが必要だが、それは政府には期待できそうにない。環境保護主義者たちとビジネス界が新たな同盟を組むしか選択肢がないように思えるのだ。互いに提携し協働することは容易ではないかもしれないが、我々が住む世界を守るためには、それが緊要なのだ。

【リチャード・ウェルフォード】 CSR アジア会長・CSR アジアの創設者で経済学博士。20年にわたり CSR や環境管理を研究。香港大学教授を定年退職後、2010年にアジア工科大学 (AIT) と共同事業であるアジア初の CSR 修士課程を創設。国際ビジネス、環境管理、労働人権、企業の社会責任についての著書多数。